

淡路島に出現した山間地の生産工房大集落遺跡群と同列の大生産工房遺集落跡が阿波にも存在

【鉄の話 あれこれ】 情報 弥生中・後期「阿波」の大鉄器製造工房村集落が出土  
阿南市加茂谷の弥生中・後期の大規模生産工房集落遺跡「加茂堂の前集落遺跡」



鉄器の製造拠点か 加茂宮ノ前遺跡(徳島・阿南市)で鍛冶  
加茂宮ノ前遺跡(徳島・阿南市)で鍛冶炉や道具出



出土した鉄器を製造する

徳島県阿南市加茂町の加茂宮ノ前遺跡で、弥生時代中期末～後期初頭（約2000年前）の竪穴住居跡20軒が見つかり、このうち10軒では鉄器を製作した鍛冶炉や鉄器作りに用いた道具類などが出土した。県教委と県埋蔵文化財センターが5日発表した。鉄器の製造工房としては国内最古級で、集落（ムラ）の半分以上が工房という特徴から、県南部に大規模な鉄器の生産拠点が形成されていたとみられる。

2018/7/6

気にかかっていた弥生時代の後期 日本の国造りに果たした淡路島の役割

日本の国造りに果たした淡路島の役割について、インターネットを調べていて、徳島県阿南市那賀川が流れ下る加茂谷の弥生中・後期の大規模生産工房集落遺跡「加茂堂の前集落遺跡」が、淡路島の大規模生産工房集落五斗長垣内遺跡や舟木遺跡にも勝るとも劣らぬ重要な遺跡であることを知りました。

阿南市加茂谷の「加茂宮ノ前遺跡」と同時期の淡路島の役割解く大きな発見だと気になっていたことを整理し、少し考えてみようとしてインターネット検索や和鉄の道に掲載してきた「阿波」「淡路」ほかの資料をひっぱりだした。既にご承知かもしれませんが、徳島の弥生中・後期 鉄器や水銀朱等の大生産工房・広域貿易の中心「阿南市加茂谷 加茂宮ノ前遺跡」について インターネットで調べた情報をお知らせ。

新しく知った「加茂堂ノ前遺跡」の重要ポイントは下記の通り

- 1 淡路島北部の津名丘陵に出土した弥生後期の国内最古の鍛冶工房村「五斗長垣内遺跡」よりも古い弥生中期末の大規模な鉄器製造や徳島の特産水銀朱・勾玉などの大生産工房を有する広域交易の中心集落で、卑弥呼の時代から初期大和時代へと引き続き阿波化加茂谷の交易中心として存続する。
- 2 弥生後期から古墳時代にかけて、水銀朱の原石辰砂を産する国内最大規模の若杉山遺跡はこの加茂宮ノ前遺跡から5Km上流側にあるが、この加茂宮ノ前遺跡では 縄文後期から周辺の若杉山の辰砂を使い水銀朱を作る最古の水銀朱の生産工房であることが判にかになった

◎ 邪馬台国や初期大和王権による日本の国造りの始まりの最大課題は朝鮮半島の鉄素材の確保。素材と日本・大和へ持ち込むルートでの安定確保。でもこの時代 畿内での実用鉄器の普及はまだこれから。そんな中で、忽然と淡路島の津名丘陵に現れた日本最古の鍛冶工房村「五斗長垣内遺跡」を含む「舟木遺跡を中心とした生産工房を持つ淡路島の山間地交易集落群」が発掘された。大陸・朝鮮半島ならびに卑弥呼の邪馬台国や大和との淡路島との関係・つながりや広域交易路の存在は未だよくわかっていない。ましてや畿内には実用鉄器製造の情報などほとんどない時代である。



「淡路島が日本の国造りに大きな役割を演じた証拠」として 大きくクローズアップされたが、その解明は端緒についたばかりである。そんな中で、淡路島 五斗長垣内遺跡よりも古い大鍛冶工房村「加茂宮ノ前遺跡」が すぐ隣の「阿波」的那賀川が流れ下る加茂谷の川沿いから発掘された。(当時はもっと海岸に近い場所だったと推定されている。)

さらにこの遺跡は縄文の後期から、すぐ近くの若杉山で採掘された辰砂から水銀朱を生産し、日本各地やから朝鮮半島までも交易を展開。この交易の中で鉄器加工技術を習得し、水銀朱に加えて 鉄器加工や勾玉などを広域交易の柱に展開していったと考えられる。

水銀朱という広域交易の柱を持つ隣の阿波にも大鍛冶工房村そして広域交易拠点集落があり、日本の国造りを進める大和の西側への窓口検討は 忽然と現れた生産工房群が出土した淡路島にだけではないことが明らかになったといえる。

しかも 阿波は紀淡海峡・紀伊水道を境に淡路・紀伊と接し、紀伊の紀の川から大和へ入る道は古墳時代から古代に至る大陸・朝鮮半島交易・交流路であり、渡来人の道でもあった。

鉄器加工技術や製鉄技術の大和流入はこの交流路ではないか?とも考えられなくもない。

阿波の交易拠点 加茂宮ノ前遺跡が示す「加茂谷」の「加茂」の名は紀の川から大和へ入り、鉄器加工技術と深い関係がある古代渡来系豪族・土族「鴨族・葛城氏を想起させる。

また、大和の西側を開く交易窓口のフロントは、大阪湾を内海にして、阿波・淡路島・摂津・播磨へと南北にベルト状に延びていたとも考えられ、弥生の高地性集落として知られる阪神間芦屋の高地性集落「会下山遺跡」も鍛冶工房を有していたとの情報もあり、交易の帯の中の拠点集落の一つとも考えられる。

何一つ確証はありませんが、思いは次々と広がってゆく。

畿内や日本各地に実用鉄器が普及してゆく前夜 大和の大陸・朝鮮半島への交易拠点の帯が形成され、大阪湾の海峡域や瀬戸内を自由に行き来する海人たちが大陸との交易に広く活躍していたと考えられる。

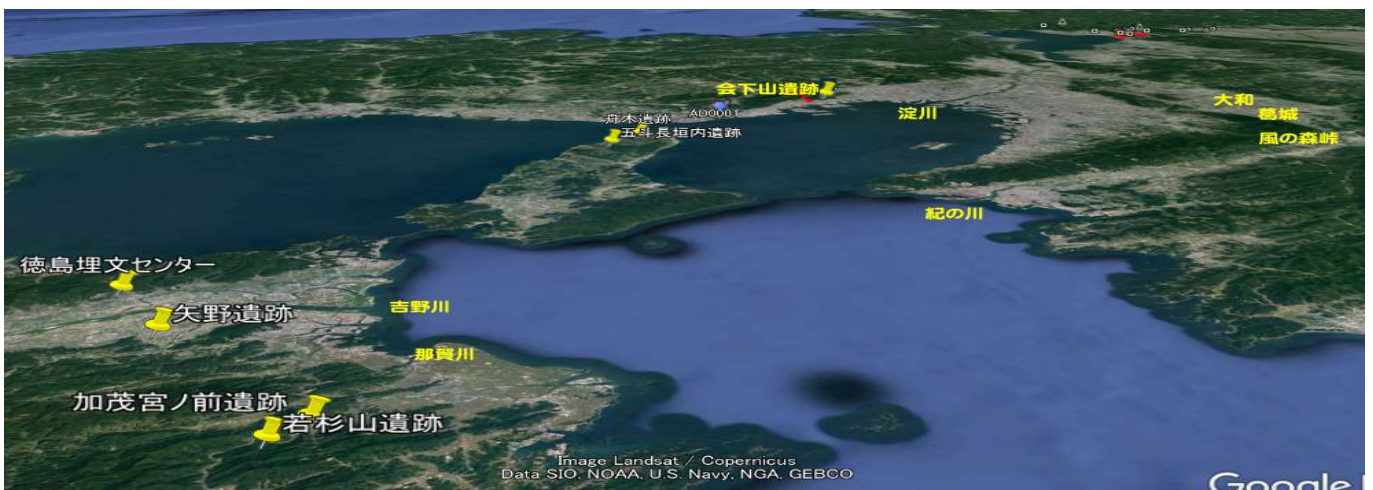
\*\*\*\*\*

### インターネット情報の整理

弥生中・後期淡路島の大規模鉄器工房集落前に徳島に出現していた大規模鉄器工房集落

徳島 阿南市 那賀川が流れ下る加茂谷 辰砂の若杉山遺跡の近く

## 弥生時代の鉄器の製造拠点 加茂宮ノ前遺跡







◎ 弥生中・後期淡路島の大規模鉄器工房集落前に徳島に出現していた大規模鉄器工房集落  
 Internet より採録 弥生時代の鉄器の製造拠点 加茂宮ノ前遺跡 概要



白いブロックの向こう側が、遺跡調査地点

徳島市の南 阿南市那賀川が流れ下る加茂谷 辰砂採掘の大産地 若杉山の約 5km 下流の河岸 阿南市加茂町大西・宮ノ前で発掘された縄文後期や弥生時代および鎌倉～室町時代の大集落遺跡。  
 2018 年の発掘調査で、弥生時代中期末～古墳時代前期初頭にかけての竪穴住居を中心とした大集落跡が確認された。そのうち弥生時代では 2 つの時期の集落が確認されている。

- ◎ 中期末～後期初頭(約 2,050～1,950 年前)の集落では 20 軒の竪穴住居を検出。
  - ◎ 後期後半～古墳時代初頭(約 1,800～1,700 年前)の集落からは 22 軒の竪穴住居を検出。
- その中でも注目されるのは鉄器製作のための国内最古級の鍛冶炉を備えた竪穴住居である。

鉄の道具が使用されるようになった弥生時代中期、当初は朝鮮半島の鉄器がそのまま使用されていたが、中期末頃になると日本各地で 朝鮮半島の鉄素材から、実用鉄器(道具や鏃など)の加工や製作が行われる。の発掘調査でこの加茂宮ノ前遺跡の竪穴住居 10 軒から鍛冶炉が発見された。鉄器の製造工房としては国内最古級で、集落(ムラ)の半分が工房という特徴から、大規模な鉄器の生産拠点が形成されていたとみられる。

竪穴住居跡で最も大規模なものは直径が約7メートルあり、その内部に鉄器の製作を行うための施設である鍛冶炉が19カ所検出。鍛冶炉は直径30~40センチで、鉄をやじりや小型ナイフなどの小さな鉄器に加工するためのもの。周囲からは鉄器に加え、鉄器の形状を整える台石、製品を仕上げる砥石などが出土。

日本列島に鉄器製作技術がもたらされた時期のものであり、初期の鉄器製作と利用を考える上で貴重な成果を得られました。

石のやじりや糸を紡ぐ道具の紡錘車、古代の祭祀などに使われた赤色顔料・水銀朱を生産する石杵や石臼なども確認。さらに、ガラス玉や管玉など、県内で数点しか出土していない希少な装飾品も多数含まれ、出土品は計約50万点にも達する。

これらのことから、集落は鉄器以外にもさまざまな物品を製作する工房として活用され、交易拠点としても繁栄していた可能性があるという。

県教委などは2016年度から、加茂宮ノ前遺跡の発掘調査を実施。17年2月には出土品の分析などから、南西約5キロにある若杉山遺跡で採掘された原料を使い、水銀朱を製造した工房跡との調査結果を公表している。県教委によれば、同時期の鍛冶炉は九州や中国地方にもあり、県内では矢野遺跡、名東遺跡(以上徳島市)、光勝院寺内遺跡(鳴門市)の3カ所で確認されているが、県南部では初めて。

また、「他の遺跡では鍛冶炉を備えた住居跡は1、2軒だが半数もあるのは全国的にも特異」としている。

**国内最古最大の鍛冶工房村と注目を浴びた淡路島 五斗長垣内遺跡にも匹敵する鍛冶工房を有し、それよりも約100年古い日本最古の鍛冶工房村の性格を併せ持つ弥生時代中期末の交易拠点集である。**

発掘が進むにつれ、縄文時代の辰砂精製の遺構や鎌倉時代の集落遺構も見つかかり、縄文時代 若杉山の辰砂の生産交易拠点から、弥生時代中期には さらに工具として使われる鉄器製造の生産にも進出し、広く辰砂・鉄器加工の生産工房を有する広域交易の拠点集落に成長したとみられる。

## ◎ 出土した弥生中期末の鍛冶工房の竪穴住居遺構



3号竪穴住居(南から)

最も規模が大きいのは直径が約7mの3号竪穴住居で、建物の床面が赤く焼けた場所(鍛冶炉)が19箇所見つかっている。その周囲からは鉄器の形状を整えるための台石、敲石や、製品の仕上げを行うための砥石などが出土している。鍛冶炉が使用された時期は、いずれも中期末~後期初頭にかけての時期である。



加茂宮ノ前遺跡から出土した鉄器を製造するための道具類(下部)や鉄製品





中央の炉



赤く焼けた鍛冶炉

鍛冶炉が発見された竪穴住居内からは、水銀朱の生産に使用した石杵や石臼のほか、石鏃を製作した時に出たサヌカイトの小片類、糸を紡ぐ道具である紡錘車などが出土しており、この建物が鉄器の製作以外にも、さまざまな物品の細作のための作業場として使用されていた可能性が考えられる。



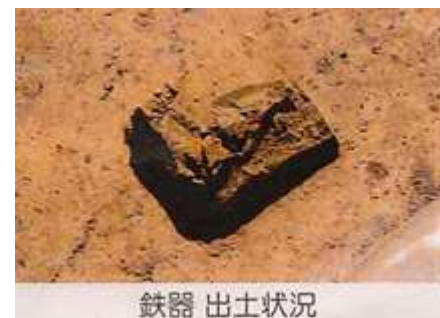
(2) 加茂宮ノ前遺跡 竪穴住居42軒中10軒に鍛冶炉  
弥生時代中期末～古墳時代初期



竪穴住居内 遺物出土状況



砥石 出土状況



鉄器 出土状況







◎「加茂宮ノ前遺跡」は、縄文後期から国内最大の水銀朱生産の拠点地 2019.2.19.

縄文時代後期の集落が確認され、円形石臼遺構（ストーンサークル）のほか、国内最多となる大量の水銀朱関連遺物が出土。水銀朱の生産の始まりが縄文時代にまでさかのぼることが明らかとなった。



縄文時代集落の広がり（手前はストーンサークル）

大量出土の水銀朱生産関連遺物

2019年(平成31年)2月19日に徳島県教育委員会、及び徳島県埋蔵文化財センターの発表によると、阿南市加茂町の「加茂宮ノ前遺跡」で、古代の祭祀に使用された赤色顔料である水銀朱を生産した縄文時代後期(約4000年前)の石臼や石杵が300点以上。また、水銀朱原料としての辰砂原石が大量に出土した。水銀朱の関連遺物の出土量としては国内最多、生産拠点としては国内最大かつ最古級であることが確認された。石臼の大きいものは直径30cm、石杵は約10cm、生産した水銀朱を貯める土器や耳飾りはじめ関連遺物は1000点以上。また、縄文後期の竪穴住居跡、石を円形状に並べた祭りや儀式用とみられる遺構300点以上が見つかっている。さらに畿内で縄文期から信仰された阿波の結晶片岩製の石棒が数多く出土していることも興味深い。阿波地域は、縄文後期より弥生時代、そして邪馬台国時代にかけて継続的に水銀朱の精製・生産・祭祀を行った日本における水銀朱祭祀の先進地であったことを示している。加茂宮ノ前遺跡が確実に若杉山遺跡より古くから、辰砂から水銀朱を取り出し、広い交易ネットワークを持ち、広域交易を通じて、鉄器製造の技術をも習得していったと考えられる。

弥生の中・後期 阿波 加茂宮ノ前遺跡(徳島・阿南市) & 淡路島の生産工房群

参考にした資料 ならびに 和鉄の道に掲載主要資料



■ Internet より 加茂宮ノ前遺跡(徳島・阿南市)の発掘調査

- ◎ 徳島新聞 2018.7.6.ほか  
鉄器の製造拠点か 加茂宮ノ前遺跡(徳島・阿南市)で鍛冶炉や道具出土  
<https://www.topics.or.jp/articles/gallery/69979?ph=1>
- ◎ 加茂宮ノ前遺跡 現地説明会資料の概要  
(インターネットに抜粋してまとめ掲載されていた2018.7.7. すえどんのフォト日記より)  
<https://sueyasumas.exblog.jp/26992359/>
- ◎ 忌部文化研究所通信 邪馬台国と水銀朱と阿波  
“徳島の歴史を塗り替える考古学発見”  
「加茂宮ノ前遺跡」は、縄文後期から国内最大の水銀朱生産の拠点地  
<http://www.awainbe.jp/tsuushin/no024/>

■ 和鉄の道 Iron Road 弥生・古墳時代 淡路島・阿波の鉄について

- ◎ 阿波 鍛冶工房から砂鉄が出土した弥生の大集落「矢野遺跡」を訪ねる 2010.2.6.  
弥生時代中期末から北九州と時期をほぼ同じくして鉄器生産を始めた鍛冶工房  
<http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/iron6/1003awa00.htm>
- ◎ 南北市糴(してぎ) 朝鮮半島と倭を結ぶ「和鉄(てつ)の道」 2011.8.25.  
<http://www.infokkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1109yayoiironroad.pdf>
- ◎ 海人族と密接な鉄器加工・製塩などの生産工房を持つ淡路島山間地集落遺跡群の中心  
【津名丘陵 舟木集落遺跡 弥生後期・終末期】現地探訪 2018.8.29.  
<http://www.infokkna.com/ironroad/2018htm/iron14/1809awaiifunaki00.htm>
- ◎ 弥生後期から卑弥呼の時代へ バールを脱いだ「弥生のIron Road 和鉄の道」  
淡路島 五斗長垣内遺跡の謎 シンポ 2010.11.21. 聴講して  
<http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/iron6/1012gossa00.htm>
- ◎ 古代 大和への道【4】 紀ノ川水系【2】  
古代「紀路」紀ノ川の流れに沿って大和へ Country Walk  
<https://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/7iron15.pdf>



淡路島弥生中・後期の林間生産工房遺跡群

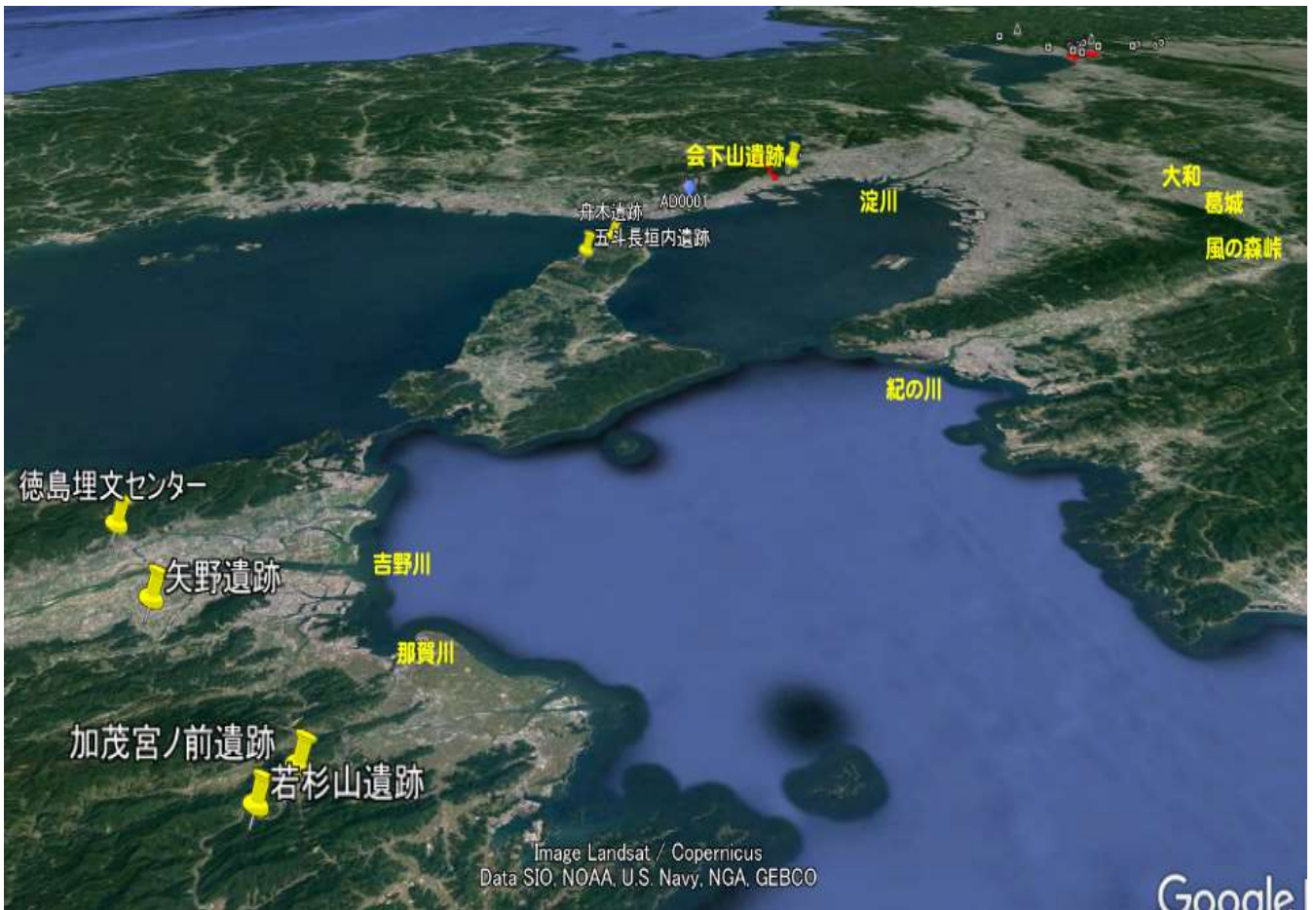


新羅の皇南大塚南墳 5世紀 長さ6.6cm  
西済の武寧王 (在位501-523) の陵から出土した勾玉  
平塚遺跡(3世紀前半) ガラス製の丁子環勾玉

朝鮮半島日本側主要交易品例 勾玉



◎ 朝鮮半島・日本各地への主要交易品の生産工房が出土した「加茂宮ノ前遺跡」  
日本の国造りへの阿波の国の役割にも注目 by Mutsu Nakanishi



「国生みの島 淡路島」 弥生時代の中・後期 国内最古最大級の鍛冶工房村「五斗長垣内遺跡」や舟木遺跡を中心とした鍛冶工房や製塩や干し貝などの生産工房など交易拠点集落群が北淡津名丘陵の山間地に現れる。特に鍛冶工房村の出現は次の卑弥呼の時代・初期大和と朝鮮半島・大陸をつなぐ大トピックスとして、大きく取り上げられた。

瀬戸内に面した西への玄関口とはいいながら、ほかに大和や朝鮮半島との関連を示す遺構・遺物が見つからない中で、朝鮮半島で作られた鉄素材が鉄器に加工され、実用鉄器・武器として、大和を中心とした広域貿易網に乗



って広がってゆくとの構図が想定され、国生み伝承の淡路島が大和の西の玄関口として機能していた可能性を強く示唆されたが、そんな報道に消化不良気味でもあった。

(淡路島の交易中心とはいっても、大和の玄関口との確証は見つからず、次の古墳時代を象徴する大規模な墳墓もなく、淡路島の役割が明確にならないまま、ムードだけが広がってゆく。

卑弥呼・初期大和 日本の国造りの始まりへの淡路島の役割・和鉄の道筋がまだ見えてこない。)

一方、淡路島の南の「阿波」には、この時代の数々の遺跡があり、特に若杉山に代表される水銀朱の原料辰砂は全国に広がってゆく主要原産地である。

また、矢野遺跡に代表される鍛冶工房などの生産工房も見つかっており、また次の時代の展開を示す大規模墳墓もあり、紀の川を通じて大和へつながる道は渡来人渡来・交易の道として広く知られている。

そんな阿波徳島で、**昨年 淡路島の五斗長垣内遺跡よりも前の弥生時代に、五斗長垣内遺跡に匹敵する国内最古で大規模な鍛冶工房や辰砂の生産工房を有する大規模集落「加茂宮ノ前遺跡」が出土した。**

場所は徳島市の南 阿南市那賀川が流れ下る加茂谷 辰砂の大産地 若杉山の産地の約5km 下流の河岸で、日本最古の鍛冶工房を有する交易拠点集の出土である。

また発掘が進むにつれ、縄文時代の辰砂精製の遺構や鎌倉時代の集落遺構も見つかっている。

発掘調査が進むにつれ、縄文時代 若杉山の辰砂の生産交易拠点から、弥生時代中期には広く鉄器製造の生産にも進出し、辰砂水銀朱・鉄器製造や勾玉など装飾品の生産工房群の存在も明らかになり、広域交易の拠点集に成長してゆく姿が明確になってきた。これらの主要交易品は当時の朝鮮半島の鉄素材を入手する主要日本側交易品であることも注目される。弥生の中・後期 淡路島だけに突然 交易拠点集落が現れたのではない。

阿波にはその後、弥生中期末から後期にかけ、阿波国の中心に発展する吉野川下流域 鮎喰川の扇状地にやはり辰砂・鉄器加工の生産工房を有する大規模集落矢野集落遺跡が出現。

この遺跡も広く交易に携わっていただろう。

淡路島の交易拠点舟木遺跡などと共にこの地域で 水銀朱辰砂や装飾加工品・塩・干し貝などそれぞれの地域特産品を交易するかたわら、当時の交易の中心である鉄素材の加工技術を交易の中で取り込み、鉄器加工を交易中心製品に育て、広域交易ネットワークが作り上げられていったことが見てくる。

もう一つ忘れてはならない阿波特産の交易品 阿波の青石もある。

これらのことから、鉄器加工に焦点を合わせると

**阿波の辰砂 淡路島の塩・干し貝などを広域交易を展開する中で、鉄器加工の技術も習得して、多様な鉄器製造を交易中心品に加え、それぞれの拠点が連携しつつ、大和のフロントに広域貿易ネットワークを構築し、大和の窓口として機能したとみえる。淡路島とともに 阿波の国の重要性が見えてくる。**



阿波という先にも示したごとく辰砂の広い交易が示されるが、広い交易品としては「阿波の青石・結晶片岩」も注視しておかねばならぬ。古墳時代初期大阪湾内沿岸各地にこの阿波の青石を使った石室が築かれた古墳が広く分布していることが知られる。この阿波の青石は大阪湾を広く行き来する交易網がすでにあった証拠ともとらえられる。大阪湾沿岸の数多くの古墳の石室に使われた図面が出てきましたので付記。

インターネット検索で得た資料から 海洋転記ならびに写真や図も使わせていただきました。

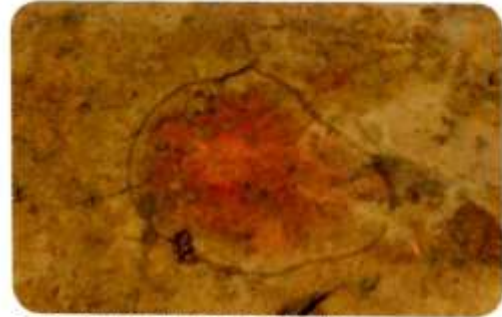
2019.6.28. Mutsu Nakanishi 作成



## ◎ 参照 付記

この資料作成中に届いた本年の「発掘された日本列島 新発見考古速報 2019」にもこの「加茂堂ノ前遺跡」の発掘についての記事が掲載されていましたので、アウトライン把握の手助けに、あわせて転記掲載。

徳島県南部の加茂宮ノ前遺跡では弥生時代中期末から後期初頭（約2000年前）の大規模な鉄器製作遺跡が発掘され、竪穴建物20棟のうち10棟から鍛冶を行った痕跡が検出されました。鍛冶炉は床面に掘り込みを設けず、直接木炭を積み上げただけの構造で、そこにフイゴで風を送り、鉄素材を加熱し、鑿で必要な形に切断し鉄鑿など小型の鉄器を作っていました。長径30cm程度の変色した鍛冶炉の跡が複数発見された竪穴建物もありました。この時期、鉄素材は平たい石の上に置いて石製のハンマーでたたき延ばしていたと考えられます。そうした白石と鍛冶石が出土したほか、鉄器の刃を研ぐ砥石も見つかりました。



加茂宮ノ前遺跡・竪穴建物床面の鍛冶炉跡  
(提供：徳島県立埋蔵文化財総合センター)

弥生時代  
（藤田佳男）  
鉄器製作の拠点的集落を確認



発掘された  
日本列島  
2019  
新発見考古速報  
2019年刊

この遺跡では、辰砂という水銀朱の原料を石杵と石臼を使って粉末にする工程も行われていました。ここから南西5kmの若杉山遺跡で辰砂を採掘した跡が確認されており、若杉山遺跡で採取した辰砂で水銀朱を生産し、供給していたと考えられます。弥生時代の後期には列島各地で鉄器化が進行します。加茂宮ノ前遺跡は、まさに鉄器化が進行する時期の鉄器製作遺跡で、大阪湾岸周辺地域における鉄器生産技術やその体制を知ることで重要な遺跡といえます。弥生時代後期の社会にとって貴重な二つの文物を生産していた集落跡として極めて貴重です。

「発掘された日本列島 - 新発見考古速報 - 」2019 より転記

2019.6.28. 作成 Mutsu Nakanishi